遊?戯?王 HX ―HololiveNext―

どらごん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ホロライブの方々とたくさんの人と出会い主人公が成長する話ですわ

初めて世に出すので下手なのはご了承くださいですわ

まぁ緩く楽しんでください

あと気分屋な為投稿不定期

下Ｔｗｉｔｔｅｒ

ｈｔｔｐｓ：／／ｔｗｉｔｔｅｒ．ｃｏｍ／ｄｏｒａ３ｖｎ／ｓｔａｔｕｓ／１５４６１９２７３３０７７１２７１６８？ｓ＝２１＆ｔ＝ｍＬｇＷＥｎｒｃＳｆＫ９Ｙ８

fZEH—WrA

目次

1枚目　正義の決闘者 ―――― 1
2枚目VSラプラス・ダークネス　暗黒世界の罠（トラップ） ―――― 7
3枚目　VS　ラプラス　HEROを継ぐ者 ―――― 16
4枚目　登校だ！同行だ！ ―――― 26

1枚目　　正義の決闘者

遥か昔、カードには精霊が宿るという話があった、その精霊達は人々と共に暮らし笑い平和だったという。だがある日その精霊達を悪用しようとした者が現れ精霊達は人々の前から姿を消した…だが、本当にカードと心を通わせた真の決闘者は精霊が見えるという…

調査員の資料の一部

「ま、精霊なんておとぎ話だろうな…」
電車に揺られながらスマホをぼんやりと眺めながらそんなつぶやきを漏らした彼こそが、本作の主人公　義電遊詩（ぎでんゆうし）
『次は～保炉街～保炉街～』
そして今流れたのが本作の主人公が住む街、保炉街自然に囲まれつつも近代感を思わせる街で近くの山にホログラムデュエルアカデミア通称ホロアカがある
プシュゥという音と共に1人の男が降り立った
「ここが保炉街か…」
期待に胸を膨らませ駅を出た。

初めて降りた駅だったが引越し作業で何回か車で寮まで向かったことがあるため迷わなかったが…坂道がきつい…
「はぁはぁ…やっと着いた…ここが…俺が住む…寮…車無いときついな…」
着くと寮を眺めている小さな女の子が居た。
（小さい子だな迷子かな）
小走りで近づきその子の目線になるように中腰になり優しい口調で
「君どうしたのこんなとこで」

と聞いたが女の子は振り返り
「なんだ貴様…」
小さな女の子はギロりと睨んできた。
「いや、ここはホロアカ、学校に通う人の寮だから、何してるのかな？」
「いや、吾輩ホロアカの入学生だぞ貴様なんなんだ」
「ん～君みたいな小さな子どもにデュエルははやいんじゃないかな？」
「貴様…吾輩が小さな子どもだと…？」
睨みつける視線が強さを増し、どうするべきか悩んでいた時
「あ、遊詩くん？」
引越し作業の際お世話になり、これからもっとお世話になる声が聞こえてきた
「高嶺さん！今日から色々よろしくお願いします！」
「そんな堅苦しくしなくていいから、私からもよろしくね」
「待て、幹部こいつも住むのかここに?!」
俺と高嶺さんのやり取りを聞き小さな子が声をあげて聞いてきた
「そうだけど？」
何か問題？と言わんばかりのキョトンとした顔を高嶺さんはしていた
「吾輩は反対だ！」

問題しかないらしい
「あの高嶺さんそちらの方は…」
「あぁ、彼女はラプラス、君と同じホロアカの入学生だから仲良くしてね」
「えぇ!?」（マ〇オさん）
まさか、本当にホロアカの生徒だとは…謝謝〜！
「ふっ、分かればいい、刮目せよ…吾輩の名は、ラプラス・ダークネスだ！」
「……」
「おい、貴様なんなんだその目は」
「いや…ねぇ…」
こんな人が同級生か…
「まぁまぁラプは落ち着いて、遊詩くんはいこれ」
「これって、Dケースとデュエルディスク…」
「ホロアカの生徒には必須のものだし忘れないうちにね」
「高嶺さん、ありがとうございます！」
「吾輩を抜きに話を進めるなー！」
横にいたラプラス・ダークネスが叫んだ
「だいたい貴様！さっき吾輩のこと同級生の癖に小さいと思ったろ！」

「いや、はは…」
「思ったんだな、やっぱり貴様…！こうなったらデュエルだ！」
なんて自然な流れでデュエルが始まるんだ…
「いや、その俺デッキ無くて…ちょっと準備するから待ってもらって…」
「デッキ無いとか貴様本当にアカデミアの生徒か…？幹部使い方を教えてやってくれ」
「はーい、じゃ遊詩くんこっち来て」

5分後

「まったかね～！ラプ、遊詩くん準備できたよ」
「まぁほとんどスターターデッキだけど…」
苦笑いをしながら顔を少しポリポリとかく
「ふっ、ではやるか」
そういうとラプラスは俺と距離をあけ決めポーズを取りながら
「ふん、貴様吾輩に喧嘩を売ったことを後悔させてやる吾輩の暗黒の罠デッキの前では全てが無力だということをな！」
と高らかな声をあげてデュエルディスクを展開しDケースをデュエルディスクには

めた

「えっとね、遊詩くん、デュエルディスクを腕にはめて腕を曲げると勝手に展開するからそしたらDケースをはめてしたらディスクが色々処理してくれるからデュエル準備完了って言われたら、ラプと一緒に決闘（デュエル）って叫んで」

「分かりました。はめて、腕を曲げて、Dケースをセット」

『Dケースセット完了、プログラムオールクリア、デッキ枚数メイン４０、エクストラ１１、デッキシャフル完了全行程クリア、デュエル準備完了です。』

これがこっちでの初デュエル…

「いくぞ！貴様！」

「ああ！やってやるぜ！」

「「決闘（デュエル）！」」

２枚目ＶＳラプラス・ダークネス　暗黒世界の罠（トラップ）

「「決闘(デュエル)!!」」
　ラプラス８０００　遊詩８０００
「先行は貴様に渡してやる」
「じゃあ有難くいただこうかな、えっと、先行はドロー無しでスタンバイフェイズ、メインフェイズ、手始めに…Ｅ・ＨＥＲＯフェザーマンを通常召喚！」
　ハァッ！とバサッと羽根があるＨＥＲＯが現れた。
　Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン　Ｌｖ３　Ａ１０００　Ｂ１０００
「すっげぇぇぇぇこれがホロライブデュエル…！ソリッドビジョンによって３Ｄ的にモンスターが現れるのかっけぇぇフゥ！」
　とんでもないはしゃぎかたをする遊詩を見ながら心配そうに
「１ターンに１度しか通常召喚できないけど大丈夫かな、遊詩くん…フェザーマンは効

果を持たないバニラモンスターだけど…」
　と高嶺ルイはお茶を飲みながら鳥４匹に餌を与えながら見守っていた。
「貴様バニラモンスターとかバカにしているのか?!」
「ふん、別にいいでしょうが、僕はカードを1枚伏せてターンエンド」
（遊詩くんの手札は3枚、伏せが1枚…さて、ラプはどうでるか…）
「吾輩のターンドロー！貴様に見せてやる、吾輩の暗黒デッキの力をな！」
　叫びながらふっ、と軽く笑いラプラスが動きはじめる
「まずは、悪王アフリマの効果を発動！効果により最恐のフィールド魔法　暗黒世界シャドウディストピアを加え発動！」
　ラプラスが叫びフィールド魔法を発動すると真っ暗な闇が世界を覆った。
「すげぇ、…フィールド魔法も反映されるのか…」
「驚くのはまだはやい、吾輩は悪魔穣リリスを通常召喚！」
　闇の中から、1匹の悪魔が現れた。
　悪魔嬢リリス　Ｌｖ３　Ａ２０００Ｂ０
「Ｌｖ３で攻撃力２０００?!攻撃力高すぎるでしょ！」
「落ち着け、リリスは自身の効果で攻撃力が半分になる、だがリリスの本領発揮はここからだ、リリスは1ターンに1度自分の闇属性モンスターをリリースし、デッキから3枚

の通常罠を選びそれを裏向きにして相手に1枚選ばせ手札に加える。」
「けど、リリースするモンスターがいないじゃないか」
「いるだろう、貴様のフィールドに」
　ニヤリとラプラスが不敵な笑みを浮かべた。
「何を言ってるんだ、フェザーマンは風属性だし、そもそもこっちのモンスターだし」
「ふっ、フィールド魔法　暗黒世界シャドウディストピアは！フィールドの全てのモンスターを闇属性に変え自分フィールドのモンスターをリリースする時代わりに貴様のモンスターをリリースする事ができる！吾輩はフェザーマンをリリースする！」
　グァァと鈍い声を上げながらフェザーマンが、闇に消えていった。
「なっ!?くっ、フェザーマンごめん、」
　ラプラスのデッキから3枚のカードが少し抜き出てそれをラプラスは取り
「吾輩が選ぶのはトラップトリック3枚、よってトラップトリックを1枚加え残りはデッキに戻す」
　デッキにカードが戻され自動でシャッフルがされた。
「さて、貴様のフィールドはがら空きだから、ダイレクトアタックするかゆけ！リリス！やつにダイレクトアタックだ！」
　リリスは不敵な笑みを浮かべ2枚の羽を広げ遊詩の方へ向かい闇の塊のようなもの

を投げた
「くっ……けど痛みは無いんだな、」
遊詩７０００
「当たり前だ、ホログラムなんだからな吾輩はカードを2枚伏せてターンエンドだそしてシャドウディストピアの更なる効果によりこのターンリリースされたモンスターの数までシャドウトークンをターンプレイヤーのフィールドに出す」
フィールド魔法によって生み出された闇が集まり小さなモンスターになった。
シャドウトークンＬｖ３Ａ１０００Ｂ１０００
(ラプかなりいい出だしじゃない、フィールドにモンスター2体、伏せも2枚、更にラプがかなり有利になるフィールド魔法を展開して手札は3枚もある…遊詩くんどう出る…遊詩くんの伏せもアタックでは反応しなかったのが気になるところね…)
「くっ、僕のターン、ドロー!」
(リリスとシャドウディストピアの相性が良すぎる…魔法罠を破壊するカードはないからひとまず…)
「手札からブレイズマンを召喚!そして効果発動!デッキから融合を手札に加える!」
ブレイズマンがフィールドに現れデッキから融合が1枚遊詩の手に加わった
「ブレイズマンとはなかなかいいモンスターじゃないか!だが吾輩はリリスの効果を発

動！ブレイズマンをリリースする！」
「くっそ、こっちのターンにも使えるのか!?」
　リリスが静かにこちらを見つめフェザーマンと同じようにブレイズマンが闇の中に消えラプラスの手に3枚の罠が選ばれた
「吾輩は強制脱出装置を3枚見せ、内1枚を貴様に選ばせ加えるが全て同じため強制脱出装置を手札に加える」
（こっちの妨害をしながら更に手札を増やした…）
「くっターンエンド、」
「まぁ吾輩からのプレゼントシャドウトークンを受け取るがいい」
　遊詩のフィールドに闇が集まりシャドウトークンが守備表示で出された
「吾輩は絶対に勝つ！吾輩のターン！ドロー！」
　ラプラスは引いたカードを見てニヤリと笑い勝利を確信した眼差しに変わった。
「まずは悪王アフリマを通常召喚！」
「それは最初に捨てたモンスター?!」
　ワオーンと犬のような生物の遠吠えがひびく
「悪王アフリマの効果により貴様の場のシャドウトークンをリリースしデッキからカードを1枚ドローする、そして！この時アフリマ以外をリリースした場合ドローではな

く、デッキから守備力２０００以上の闇属性モンスターを手札に加える！吾輩は、暗黒の魔王ディアボロスを手札に加える！」
「暗黒の魔王ディアボロス…あれが恐らくラプラスさんの切り札…けどレベル７以上だからアドバンス召喚するには２体の生贄が必要だし既に通常召喚はして…
「馬鹿か、貴様？言っただろうこの勝負必ず勝つと！」
　遊詩の考えを否定するようにラプラスが言葉を被せる。
「吾輩はリリスの効果で吾輩のフィールドのシャドウトークンをリリースし、トラップトリック２枚、メタバース１枚を選ぶ、さぁ１枚を選べ」
「じゃあ真ん中で、けど結局ディアボロスは…」
　遊詩はパッとフィールドを見るとその真ん中に大量の闇が集まり始め巨大な球体が現れている
「なっ、なにが起きるんだ…」
「吾輩のフィールドのモンスターがリリースされたとき暗黒の魔王ディアボロスは手札から特殊召喚ができるのだ、暗黒の世界を牛耳る魔王よ！その力で全てを闇に染めよ！君臨しろ！暗黒の魔王ディアボロス！」
　集まっていた闇の球体から龍の腕や脚が現れ巨大な羽根がその闇を退かし禍々しい龍が咆哮を上げながら現れた

暗黒の魔王ディアボロス　Ｌｖ８　Ａ３０００Ｂ２０００
「っっ…！なんて迫力だ…！」
「いくぞ！バトルだ！吾輩はディアボロス、リリス、アフリマでダイレクトアタック！」
遊詩はアフリマにひっかかれ、リリスの闇の塊をくらい、ディアボロスの闇をくらいとばされた
「ぐぁぁぁぁ!!」
遊詩　１３００
「吾輩の勝ちは確定的だな？カードを２枚伏せターンエンドそしてこい！シャドウトークン！」
シャドウトークンが２体現れた
「確かにこちらの場には伏せが１枚でライフは１３００しかない対するラプラスさんの場は全て埋まってて、ライフも８０００ある危機的だ、けど」
「けど？どうした？」
「勝負は最後の最後まで何が起きるか分かんないから面白いんだ！」
（あいつ、この状況でまだ諦めてないだと…?!だが吾輩の場にはトラップトリックに強制脱出装置、そしてメタバースがある。トラップトリックで状況に応じたカードを打てて強制脱出装置もある、シャドウディストピアもあり保険のメタバースもある吾輩は勝

てる！）

「いくぜ…俺のターン！ドロー！」

恐らく遊詩のラストターン全員が遊詩のドローに注目していた、そして遊詩はカードを見ると諦めない眼差しが更に強くなった

「俺はまずこの闇を払い除ける！魔法、ライトニングストームを発動！効果により相手の攻撃表示モンスターを全てか魔法罠をはかいする俺は魔法罠を選択！」

「なっ、なんだと!?くっ、一応吾輩はチェーンしてメタバースを発動し２枚目のシャドウディストピアを手札に加える！」

激しい稲津と嵐がラプラスの魔法と罠を全て破壊していき、太陽の光がフィールドにさしラプラスのモンスター達を照らした

「これで厄介な闇の世界は消えた！そして俺は手札の戦士の生還を発動し、フェザーマンを手札に加える！そして融合を発動！手札のフェザーマンとバーストレディで融合！」

フェザーマンとバーストレディが現れ融合されていく

「フェザーマンとバーストレディ…一体何が来る…」

説明しよう！フェザーマンとバーストレディは、融合する組み合わせの中でもトップクラスに多いのだ！

「２人の異なるＨＥＲＯよ！今１つとなりて新たなＨＥＲＯとなり道を切り開け！融合召喚！これが俺の切り札！Ｎ（ネクスト・ヒーロー）・ＨＥＲＯ！エレメンタラース！」

ウォォ！と気迫のある声を上げながら上空から白銀のスーツに白のラインが全身に巡って背中には小型のジェットパックを装備しそして右手は少し大きく鋭い爪が装備された近未来のようなＨＥＲＯが現れ、スタッと着地した

Ｎ・ＨＥＲＯ　エレメンタラース　Ｌｖ７　Ａ２５００　Ｂ２０００

3枚目　VS　ラプラス　HEROを継ぐ者

「エレメンタラースを融合召喚！」
　スタッと着地し、右手のクローを突き出しながら立ち上がった
N（ネクスト）・HERO（ヒーロー）　エレメンタラース　Lv7　A2500　B2000
「エレメンタラース…？幹部聞いたことあるか？」
「私も無いわ…まずN（ネクスト）・HERO（ヒーロー）自体初めて聞いた…」
　困惑する2人をよそに遊詩は口を開く
「エレメンタラースは素材にしたHEROの属性によって効果が変わる！炎属性を素材にした為相手モンスターを破壊したときそのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」
　ハァァ！とラースが叫ぶと白のラインが真っ赤に変わった
「くっ、ならば吾輩はリリスの効果でリリス自身をリリースし強制脱出装置を2枚トラップトリックを1枚選び、さぁ選べ！」
「どこでもいいけど…じゃ真ん中で」

　真ん中のカードがラプラスの手札加わり残りの２枚はデッキに戻った
「真ん中のこれを加え残りはデッキに戻す、これで１番ダメージを与えられるリリスがいなくなった」
　ラプラスはモンスターを犠牲に自らのライフを守る魂胆だった
「うまいけど、関係ない、バトルだ！俺はエレメンタラースで、悪王アフリマを攻撃！エレメントクロー!!」
　エレメンタラースは悪王アフリマを切り裂き破壊した
「くっ…」
　ラプラス７２００
「そしてエレメンタラースの効果によりアフリマの攻撃力１７００のダメージを与える！フレイムクロー！」
　ハァァ！とエレメンタラースから赤い斬撃が飛びラプラスのライフを削った
　ラプラス５５００
「くっ、だがこれで貴様の攻撃は終わっ…
「何勘違いしてるんだ」
「ひょ？」
「俺のバトルフェイズは終了してないＺＥ！」

（例のＢＧＭ）
「いや吾輩も乗ってしまったが貴様のフィールドにはエレメンタラースしかいないではないか！」
　そう遊戯王はモンスター１体につき１ターンにできる攻撃は１度なのだ
「ふっ、エレメンタラースは風属性を素材にした場合相手のモンスター全てに攻撃できる！いっけぇえエレメンタラース！ウィンドクロー！」
　エレメンタラースの白のラインが今度は緑色に変わりシャドウトークン２体に向かって背中のジェットパックで加速、急接近し切り裂いた
「くっ、またモンスターが破壊された…ってまさか！」
　ラプラスは、何かに気づきハッとした
「そう！再びダメージを与える！フレイムクロー！」
　再び赤い斬撃がラプラスを襲った
　ラプラス３５００
「くっ！だが吾輩のライフはまだある、ディアボロスも健在！次のターン貴様のエレメンタラースを破壊し吾輩のディアボロスで勝つ！」
「いや！俺は勝つ！この瞬間リバースカードオープン！メタバース！これによりフィールド魔法を１枚発動する効果を選択する！魔王が闇の世界を牛耳るように、ＨＥＲＯに

はＨＥＲＯの戦う舞台があるんだ！フィールド魔法スカイスクレイパー！」
　メタバースが発動され電子回路が巡ると地面から次々と高層ビルが伸び現れた
　そしてその１番高いビルの上にエレメンタラースは立っていた
「さぁいけ！エレメンタラース！暗黒の魔王ディアボロスに向かって攻撃！」
「冗談だろ？吾輩のディアボロスは３０００貴様のＨＥＲＯでは届かない！」
　ディアボロス３０００　エレメンタラース２５００
「ＨＥＲＯは必ず勝つ！スカイスクレイパーはＥ・ＨＥＲＯが戦闘する時相手モンスターの方が攻撃力が高い場合１０００ポイント攻撃力をアップする、そしてＥ・ＨＥＲＯのみを素材に出したエレメンタラースはＥ・ＨＥＲＯとしても扱う！」
　エレメンタラースの白のラインが暗い町の夜空に強く光り輝く
「なんだと!?」
「いっけぇぇぇぇ！エレメンタラース！」
　遊詩の叫びに応えるように背中のジェットパックを勢い良く噴射しエレメンタラースは落下しながら更に速度を上げていく
「スカイスクレイパークロー！」
　ハァァ！と叫びながらエレメンタラースは、クローをディアボロスに向けディアボロスも闇を放ち対抗したがエレメンタラースの勢いを抑えれず闇と共に切り裂かれた

「くっ…！吾輩のディアボロスが…！」

ラプラス３０００

スタッとエレメンタラースは遊詩の隣に着地し、

「エレメンタラース炎属性の効果により、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを受けてもらう！」

「?!」

三度（みたび）エレメンタラースの赤い斬撃がラプラスを切り裂いた

「馬鹿な、吾輩が負けるだと!?」

ラプラス０

『決着勝者義電遊詩』

デュエルディスクが無機質な声で勝利を告げた

「ラプに勝つなんて遊詩くんやるじゃない」

微笑みながらその場に倒れたラプラスに向かったが先に遊詩がラプラスに小走りで向かい

「僕の勝ちですね、ラプラスさん」

と満面のドヤ顔をし手を差し伸べた。ラプラスは

「今回はたまたま！そうたまたま！負けただけだ！次やったら吾輩が勝つからな！」

とカンカンに怒りながら騒ぎ始めながらじたばたと暴れている
「仲良いね～」
とルイは一言呟き２人の言い合いを見ながらお茶を飲んだ

１０１号室　管理人室にて
グツグツグツグツ
「はーいみんな今日は疲れただろうからいっぱいお鍋をおなべ～」
（え、なにその寒いギャグ…）
食卓には４人が囲み座っていた、自分のダジャレをたは～と笑う高嶺さん、ギャグにひいてるラプラスさんに、そして…
「ねぇぇぇ！さかまたのおにくぅぅぅ！」
肉を鳥に取られてる小さい少女…ラプラスさんと同じくらいの背丈だがここで並ん

で鍋を食ってるということは…
「えっとさかまた…さん？でいいのかな？」
「ぽえ？」
　さかまた？と自ら言っていた少女に問いかけると、あほそうな声にあほそうな顔でどうかしましたか？と言わんばかりにこちらを見つめてきた。
「あ～そう言えば紹介してなかったね、彼女は沙花叉クロヱ。私と一緒に住んでる子でラプや遊詩くんと同じ1年生だから仲良くしてあげてね」
　何もわかっていなさそうなさかまたに変わり高嶺さんが軽い紹介をすると
「ばっくばっくばく～ん、沙花叉クロヱでーす！」
　と元気よく挨拶をしてくれたさかまたに対し、
「あ、えと、義電遊詩です。よろしく」
　ちょっとオドオドとした態度で挨拶を返した。
「というか新人はなんで幹部と暮らすことになったんだ」
　鍋をつまみながら疑問をこぼした、気になってたから助かる。
「この子見ての通りだから部屋の手続き忘れてたのよ……」
　呆れているのかため息をつきながら説明をしてくれた。
「「あっ…」」

遊詩もラプラスも納得し静かにさかまたを見つめ２人もはぁ…とため息をついてしまった。
「待って?.さかまたってどんな顔してるの?.」
ただ1人なんもわかってない顔できょとんとしていた。

自室にて風呂から上がりわしゃわしゃと髪を拭き
「今日はデュエルしたし、高嶺さんの鍋美味かったな…明日入学式だし早めにねるかぁ…」
今日1日の濃さに満足しつつほとんど手をつけてないダンボールから布団を取りだし敷いた
「にしてもラプラスさんも高嶺さんも知らないなんて…不思議なカードだな…」
エレメンタラースを見ながらそのままうとうとと夢の世界に向かっていった

「Ｚｚｚ…　」
「我が主よ」

「ん、…なんだ…」
　誰かに呼ばれた、そんな気がしたため遊詩は薄く目を開けた。そこには
「ようやく話せた、我が主よ！」
「えれ…めん…たらーす??」
　先程のラプラス戦にてトドメを刺したエレメンタラースがこちらを見つめていた。
「この時をずっと待っていた。我が主よ、今ここに契約を！世界の危機が迫っている！」
「お～よろしく…」
　きっと興奮していたから夢を見ているんだ。そう思い適当に返事をし再び眠りに落

ちた。

「契約は今結ばれた。我らの力は、貴方の正義のために」

静かな夜、遊詩のデッキが光り輝いた

4枚目　登校だ！同行だ！

デッキが光り輝いた静かな夜もう1つ事件が起きていた…

「くそ…なんで俺はこうも勝てないんだよ…！」
1人の男がゴミ箱を思い切り蹴りあげた方に
「お困りのようですね。」
黒いローブで体を隠し顔は真っ黒な仮面で覆われた者が目の前に立っていた。
「んだ、お前？今の俺は負けて腹立ってんだよ、あっち行け…たく、」
男は謎の人物を無視して通り過ぎたが、
「残念です。山原　双、あなたにこの『さいきょう』のカードを渡そうとしたのですが。」
「最強のカード？…」
男は最強という単語に食いつき振り返えり怪しげな者に問いかけた。
「そのカードを使えば俺は勝てるのか？」

「それは、山原双貴方次第です。このカードをＤケースに入れデュエルディスクにはめ込んでください。」
すっと1枚のカードを向けた
「ん、あぁつかなんで俺の名前…」
男はカードを貰いカードを見た後に顔を上げ問いかけたが
「ん?あれ、あいつどこ行った?ま最強のカード試したかったけどま、いいか。」
謎の人物は消えていたが男は言われた通りカードをケースに入れディスクにはめこんだ
「…んだよ何も起きないじゃねぇか、ったくつま
『ダークウェブ起動』
Ｄケースが黒く染まりデュエルディスクからドスの効いた声で知らない音声が流れた。
「は?なんだ?うっ、あっ、ぐっ、がぁぁぁぁ!」
1筋の黒い光が全てを包み込んだ影で
「さて。どう動きますかね。」
1人闇の中で不敵に笑っていた

　ぽぽぽぽぽぽぽぽぽぽぽぽぽぽぽぽ
「んん……ん、」
　鈍い音を上げながら目覚ましを止め遊詩は制服に腕を通す、一応自由らしいが式の時はブレザーの制服を着るらしい
「ん…あれ?ん、あれ??ねくたいむず…」
　ネクタイが思うようにできずスマホで調べぶっ格好ながらも結んでみた
「まっ、いっか…」
　軽く朝食を食べ外に出ると広場に小さな少女が昨日と同じようにムスッとした表情で立っていた
「やっと来たか貴様」
「あぁ、ラプラスさん、おはよ」
　ラプラス・ダークネス、彼女は遊詩の同級生であり更に同じ寮に住んでいる。

「にしてもなんで僕を待ってたんだ…」
　階段をおりながらボソッと呟くと
「それは私から説明するよ」
　降りきった所で階段の近くにある１０１号室の扉が開いた。
「高嶺さん、おはようございます」
「待ったかね?って遊詩くんネクタイ曲がってる」
　そう言うと遊詩のネクタイを掴み慣れた手つきで直し始めた
「えっ、ちょあ
「動かないで揺れるから」
　遊詩はいきなりの出来事に驚いた、近くに歳上のお姉さんがネクタイ直すシチュエーション、髪からする甘いシャンプーの香り男子高校生の心拍数をあげるには十分すぎた
(いや近い近い近い近い近い近い!!)
「よし!これで大丈夫!今度ゆっくり教えるからね」
　ぽんと直したネクタイを叩き満足気ににこっと笑う高嶺ルイに対し
「アッアッアッアアリガトゴザイマス」
　頭が完全にパニックになり遊詩はカタコトで返事した
「じゃあラプと一緒に学校頑張ってきてね、私はこれからクロヱをお風呂に入れないと

だから…はぁ…2人とも行ってらっしゃい」
そう笑顔で送り出し101号室に呆れたような顔で戻っていった
「アッアッアッアアリガトゴザイマス」
なお遊詩は顔は赤くなりカタコトでしか喋れず完全に壊れていた
「ダメだな、こりゃ…」

遊詩がなおりラプラスと2人で学園まで向かって行く最中ふと
「というかなんでラプラスさんはなんで俺を待ってたんです?」
学園までは一本道で徒歩5分で着くが何故わざわざ待っていたのか疑問に思った
「それは幹部…高嶺ルイがラプ明日遊詩くんと一緒に行きなよってうるさいから…」
「あぁ…何となくわかった気がする…」
遊詩は、昨日今日の高嶺さんの立ち回りを思い出していた
(高嶺さんはなんというかみんなの母親のような立ち位置にいるよな…そう本人から絡んでくるしネクタイも…)
遊詩はネクタイを直された時の事も思い出し再び赤くなってきた

「なんだ貴様顔赤いぞ」
「イヤ、そんなことは、というか他の人はダメだったんですか?沙花叉さんは風呂がどうとか」
　ラプラスに思い出して顔を赤くしているのがバレたらバカにされると思い顔を振り否定し新たな話題を振った
「あ～、新…沙花叉は昨日風呂入れって言われたのに入らなかったから怒られ今洗われてるだろ」

　同時刻１０１号室浴室
「帰ってきたら入るからー!やだ～!」
　じたばたと暴れるさかまたを抑え
「昨日もそう言って入らなかったのはどこの誰かなと!」
　そう言ってルイ姉はバシャァァとさかまたの頭の上からお湯をかけ手にシャンプーをつけ泡立てわしゃわしゃと髪を洗い始めた

「ナーホーネ!」

「あと2人は学園推薦と部活推薦だから先に向かってる」
後のふたりは優等生なんだ…
「推薦ってかなりすごい事だよな、あの寮に2人も…」
遊詩は驚き、目を見開くと
「一応2人について軽く説明すると学園推薦は博衣こより、入学試験筆記は満点試験デュエルもパーフェクトデュエルらしい」
「パーフェクトデュエルってライフ一切減らされずに勝った…ってコト?!」
遊詩は更に驚き声を上げた
「声がでかいぞ貴様…試験デュエルは一応簡単に設定されてたろ…んでもう1人は風真いろは、剣道での推薦だったな」
顔も知らないがかなりの優等生2人ということだけは遊詩にも伝わったようで納得したような顔していた
「部活推薦か、部活何に入ろうかな…」
これからの学園生活を想像している遊詩に対し
「入るなら剣道部はすすめないぞ」
とラプラスは釘を刺してきた
「え、なんで…その風真いろはさんがいるから?」

「いや、風真は関係ない。剣道部のエースの豪覇　勝がかなり厳しいんだ…しかも勝負に勝利以外は価値無しとか言うらしい」
　勝負に本気な人は少なくないがどれ程本気なんだろうか聞こうとした所で
「さ、着いたぞホロアカに」
　いつの間にか校門の前にいた
「いつの間に…」
「吾輩は吾輩のクラスに行くから貴様も自分のクラスにいけ」
　じゃと言いながら手を振った…

「いや、なんでまだいるんだ…」
　手を振ったが遊詩も全く同じ方向にすすみ、２人並んで廊下を歩いていた
「そりゃ1年だし教室近いんじゃ…」
「はぁ…貴様クラスは?」
　ラプラスはため息を着きながら空気を和ますためか会話を振った
「あ、大丈夫ですよ、もうつきましたから」
「え、いや待て貴様…まさか」
　ピタリと遊詩は1ー2に止まり、慌てながらラプラスも同じように止まった

「僕のクラスは1ー2なんで、じゃあまた…
「吾輩もだ」
遊詩が後にしようと手を振りながら教室に入ろうとしたらラプラスが遊詩の言葉を遮った
「えなんて、」
「吾輩も1ー2だ…」
遊詩はこの時、ラプラスと俺は腐れ縁になりそうだと悟った

今これを見たな！これでお前とも縁ができた！
袖振り合うも多生の縁、共に踊れば繋がる縁
ドンブラザーズのお出ましだ！